曲亭馬琴『漢楚賽擬選軍談』翻刻（一） -初編その1-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2019-11-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 神田, 正行 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/20519

明治大学教養論集　通巻五三九号（二〇一九・三）八一―一一七頁

曲亭馬琴『漢楚賽擬選軍談』翻刻（一）――初編その1――

神田正行

墨川亭雪麿の合巻『傾城三国志』全四編の紹介を終了したので、引き続いて今回からは、やはり中国の講史小説を翻案した、曲亭馬琴の合巻『漢楚賽擬選軍談』（国安画。文政十二年～天保二年、永寿堂刊。三編十二冊、未完）を翻刻する。ただし、馬琴長編合巻の通例として、画中の字詰めがきつい上に、漫画の吹き出しに相当する「言葉書き」も添えられているので、『傾城三国志』のように一回で二冊（二十丁）を紹介することができない。よって不体裁ではあるが、今回は一・五冊分（十五丁）を掲出することとした。なお本編の解題は、「その3」に併載する予定である。

凡例

一、仮名は一部を除いて、現行のひらがなに統一した。また、会話を示す「」や、句読・濁点などを適宜補った。

一、読み誤りのない範囲で漢字を宛てた。その際、もとの表記を傍訓で残したものもある。また、原本における振り仮

名（小字双行の場合が多いが、稀に傍訓もある）は、一部を除いて省略した。

一、文章を読む順序を示した「合印（あいじるし）」は、その多くを形の近い記号で代用した。合印を残したのは、原本と翻刻との対照を容易にするためである。

一、本文には、内容にもとづいて適宜段落を設けた。また、話題が改まる位置に、内容を示す見出しを、◆印に続けてゴシック体で掲げた。

一、挿絵は本文の近い位置に掲げ、画中の言葉書きは同じ頁の下段に翻字した。

一、「巻（五丁の単位）」ごとに改段を行い、冊が改まる位置で頁を改めた。

一、各人物が初めて、もしくは久々に登場する場面では、原作『通俗漢楚軍談』の相当する人物を【　】内に注記した。また一部の地名や事物についても、同様の処置を行なった。なお「▼」印以下は、稿者による注記である。

一、影印ならびに翻刻の底本は、早稲田大学図書館蔵本（ヘ13-3056。改装本）である。虫損や着彩、シミなどが目立たないよう、画像には最低限の修正を施した。翻刻に際しては、拙架蔵本や立命館大学アートリサーチセンター蔵本（林美一氏旧蔵）なども参照した。

《第一冊　前表紙》※早大別本（文冊06-949）による

曲亭馬琴著
和漢撮合／初編上帙
毎篇八巻合本
歌川国安絵画
漢楚賽擬選軍談（かんそまがひみたてぐんだん）　壹

▼地模様に「鎌倉幕府」「朝日将軍」と「漢楚」、ならびに笹竜胆の紋を用いる。
▼合本のため、右が一部欠けている。

《前表紙見返し・一丁表　自序》

漢楚賽擬選軍談初編　序

毎篇八巻　合本四冊
上下二帙　毎帙二冊

智者は自適して、流行の先達たり。庸才は自適せず、人の遊ぶ所に遊びて、常に流行を追ふもの也。果敢なき冊子物語も、時好に愜へば行れ、愜ざれば行れず。書林永寿堂、こゝに見るよしや有けん、「『傾城水滸』に伯仲すべき、新著もがな」、と予に請へり。さばれ唐山の稗史は、『西遊』『水滸』の二書の外に、又翻案すべきものなし。よりて漢楚の闘戦を、頼朝・義仲両雄の、確執に綴易て、もて這物の本を作れり。抑清盛の、秦の始皇に似たる、頼政の陳渉に似たる、頼朝の漢高祖に似たる、政子の呂后に似たる、時政・義時の諸呂に似たる、牧子の呂須に似たる、義経の韓信に似たりしよしは、先輩聊評論あるを、読書者の話柄にすめり。只是のみにあらずして、義仲の項羽に似たる、覚明の范増に似たる、巴の季布に似たる、兼光の鐘離昧に似たる、伊東祐親入道の、田横に似たる、広元・善信が、蕭何・曹参と相似たる、成敗異同ありといへども、亦その趣なきにしもあらず。啻頼朝の臣、時政の壻に、樊噲の如きものなく、功成名遂て身退きたる、張子房の如きものなく、智弁敵を欺くに足る、酈食其・陸賈の如きものなく、諸呂を誅して、漢室を全くせし、陣平・周勃の如きものなし。その無ものは些許、似つかはしきを撮合して、一人なるを二人の事とす。譬ば下邳の圯橋の張良は、牛若ならねば、不可なるが如し。蓋漢楚の興亡は、『史記』『漢書』の正史あるを、演義にも亦綴たり。そを又訳せし通俗の、『漢楚軍談』さへあるを、婦幼はなほも見まく欲せず、読むといへども解し易らぬ、異邦の軍記なればなり。夫江南の橘の、江北に栽られて、枳となるものは、便是風土の妙也。かゝれば『漢楚演義』の一書も、予が架上に措ときは、変じて本邦の軍記となれり。又是風土によるものから、実は時好に推当たる、作者の手津間としりねかし。

文政十二己丑年春正月吉日新版

曲亭馬琴識　印（乾坤一草亭）

《略注》

◆智者は自適して～→典拠未詳。『傾城水滸伝』（文政八年～天保六年、仙鶴堂刊）の作者である自らを「智者」の側に置き、同作の盛行を羨んで、類似作・追随作を執筆・刊行した他の作者や書肆たちを「庸才」として軽視嘲笑する意図が読み取れる。

◆書林永寿堂～→拙稿「墨川亭雪暦『傾城三国志』翻刻（一）」（本誌第504号。平成27年）にも記した如く、永寿堂西村屋与八が、馬琴に白話小説を翻案した長編合巻の執筆を依頼したのは、文政十一年正月十四日のことであったと思われる。当初、西村屋は「女の三国志」の編述を願い入れたが（文政十三年正月二十八日付殿村篠斎宛馬琴書翰）、馬琴はこれを押し返して、「何ぞ通俗ものか演義ものをとり直し、綴り立遣」すことを約束した（文政十一年正月十七日付篠斎宛馬琴書翰）。その結果執筆されたのが、本作である。

◆『西遊』『水滸』の二書の外に～→この時点で、馬琴はすでに『傾城水滸伝』と、『西遊記』の翻案作である『金毘羅船利生纜』（文政七年～天保二年、甘泉堂刊）との執筆を続けていた。

◆物の本→「著作堂雑記抄」に、「物の本といふは、物がたり草紙の類にて、物がたりの本といふべきを、中略せしなり」（『曲亭遺稿』四五九頁。明治44年、国書刊行会）とある。

◆先輩→具体的に誰を指すのか、不明。本稿解題参照。

◆通俗の、漢楚軍談→『通俗漢楚軍談』は、元禄三年（一六九〇）序、同七年跋。夢梅軒章峯・称好軒徽庵による、『西漢通俗演義』の翻訳。『椿説弓張月』後篇（文化五年、平林堂等刊）巻末の「批為朝外伝弓張月」（門人魁蕾子名義）に列挙された「諸演義」の中にも「漢楚」が見える。

《一丁裏・二丁表》

擬秦始皇　平相国入道清盛

草も木もなびけばこそあれおのがまゝに

横紙破る窓の秋風　印（鸞斎）

擬秦丞相李斯

平家執権阿波民部大夫成良

擬秦大将章邯　妹尾太郎兼安

大汝に代りて作る番匠等が

成らぬに恚れてうちこはすめり

印（雷）印（水）

▼この図の構成と「大汝に」の歌は、成良による経島の造築（『源平盛衰記』巻二十六）を踏まえる。

《二丁裏・三丁表》

擬秦太子扶蘇　小松大臣重盛

擬秦大将軍蒙恬　豊後左衛門尉頼弘

神に祈りてうせぬと人はいは田川

御子の浄衣の色に見ゆれ婆　印（狂）　印（斎）

▼この歌は、本文23丁裏以下の物語を踏まえる。

▼図左上の鳥は烏。熊野誓文の縁による。

擬秦　趙高　秦木工頭長高

擬趙高　壻闇楽　後藤兵衛守長

擬秦二世胡亥　平大臣宗盛

時めくもしばしなりけ理あめの下

げに傘張の胤ならむ鴨　印（蓑）　印（笠）

▼「あめ（天・雨）」が掛詞。雨・傘が縁語。

▼長高は轡を持ち、宗盛の背後には鹿が描かれる。

これは「鹿を指して馬と為す」の故事を踏まえる。

《三丁裏・四丁表》

擬楚覇王項羽　旭将軍義仲
擬項羽后虞氏　松殿　山吹姫
山を抜く木曽の朝日は粟津野に
はかなく落て淡雪ぞ降る　印（曲）印（亭）

▼「山を抜く」は、項羽の大力を比喩した言葉で、『史記』に見える。粟津野は義仲終焉の地。「粟津野」「淡雪」と頭韻を踏む。

擬漢高祖　右大将頼朝
擬高祖之呂后　平政子
乱れては道もなつ野の草いきれ
刈おさめけり鎌くらの君　印（玄）印（同）

▼「なつ野」に「（道が）ない」、「刈おさめ」に「（国を）治める」を効かせる。草いきれ・刈・鎌が縁語、鎌と鎌倉が掛詞。

（4ウ・5オ　翁、長昔語をはじめる）

◆物語の発端

発端　いづれの御時にかありけん、昔鎌倉なる長谷の観世音へ、七日ばかり通夜して、をさ〳〵冥福を祈りたる、三人の男女ありけり。そが中に一人は、齢八十ばかりにて、博士めきたる翁也。又一人は四十余りなる、回国の修行者也。又一人は三十ばかりなる女房の、やんごとなき方様に、宮仕へせし者の、果てなどにやあるらん、姿の花はすがれたれども、ものゝ言ひざま立ち振る舞ひまで、なほ臈長けて見ゆる也けり。されば此三人の男女は、各々同じ日の、夕暮れより参り初めて、同じ御堂に通夜すること、二夜さ三夜さに及ぶ程に、いつとなくもの言

女「和漢の戦を取り合はせて、一つになさるは新手じやはいの。

六部「ドリヤ、膝を直して、聴聞しませう。面白いこと〳〵。

翁「これは迷惑、腹ごなしに、まづ初段から始めませうかへ。

ひ言はれて、迭に祈念の間には、語らひ敵となりにたり。

かくてある夜、かの修行者言ひけるやう、「我らは回国の身にあれば、国として至らざる方もなく、里として過ぎらざりしは稀也。さるにより、霊山霊地いへばさら也、昔、人の多く、命を落とせしと聞えたる、古戦場を、うち巡りて回向せし事、幾度といふ事を覚えず。そが中に、近世寿永の戦ひに、平家の人々、名残りなく失せ給ひたる、屋島・壇之浦、又木曽義仲に攻め破られて、軍兵十万余騎、一時に滅び失せたりと聞えし、加賀の国礪波、倶利伽羅谷の古迹なんどは、今も涙のこぼるゝ事多かり。これらの事は戦文に、記しつけたるもあれば珍しげなし。見ぬ唐土にもさる類の、多くあるべき事ながら、漢文を得読まざりければ、思ふのみにてその甲斐なし」と、言ふに翁はほう笑みて、「まことに言はるゝ事の如く、唐土は邪慳の国にて、動もすれば、戦ひに生け捕りたる、敵の軍兵を、三十万も四十万も、活き埋めにせしことさへあり。日の本は武の国なれども、人の心素直にして、さるいら酷き事をせず。人の気質の、万国に優れたる事、これにて知るべし。しかはあれどもその事の、おのづから似たるもの、亦これなしとすべからず。たとへば平相国清盛入道は、秦の始皇の、悪しき政事に似たるよしあり。又頼朝は漢の高祖に似て、義経は韓信に似たり。又政子御前の呂后に似たる、北条は諸呂に似たり。強ひて説をなす時は、はじめ義仲の勢ひは、項羽に似たりといはゞいふべし。只張良・樊噲に似たるもの、頼朝の家臣になし。」と、言ふに女房膝を進めて、「そは殊更に興ありげなる、御物語の糸口也。漢楚とやらんの戦ひを、和解して記せし物あれども、人の名も国の名も、皆耳慣れぬ事のみ侍れば、見るに物憂く、解しがたき事多かり。願ふは漢楚の戦ひを、この土の戦に取りなして、物語りし給へかし。さる時はその戦ひは、唐土にありし事にて、人は日の本の人々なれば、その名はさら也国所も定かに聞えて面白かるべし。夜の更けぬ間に語らせ給へ。やよなう〳〵」と急がせば、修行者も亦笑坪に入りて、「それはまことに聞事ならん。いざとく〳〵」とそゝのかされて、翁は笑みつゝ頭を掻き、「そはいと

難義のわざ也かし。只今も言へる如く、その行状と成敗の、これ彼いさゝか似たるものは、◆右の下へ／◆左の上より わづかに三四人に過ぎざるに、筋は漢楚の世界にて、これを義仲・頼朝の、戦ひにして説かん事、最も容易きわざにあらず。且漢楚五年の戦ひも、又義仲・頼朝の一代記も、和漢に各々実録あるを、取り合せなば木に竹を接ぐ、心地して不都合ならん。かゝれば漢楚に一人なるを、その事迹の合ひがたきは、二人の事にするもあらん。さばれ今この選仏場にて、よしなし事を囀らば、妄語の戒め恐れなきにあらねど、惜しや欲しやの愛着にて、罵り狂ふには増すよしもあらんか。もし不都合なる 次へ（4ウ・5オ）／事ありとも、聞な咎め給ひそ」と、詫びつゝ扇を取り上げて、膝打ち鳴らし咳きして、長物語をしたりける。

（5ウ　清盛、成良に庶民の監視を命じる）

◆清盛の驕奢

これより本文 平家世を取りて廿余年、子孫親族栄華に誇り、官位俸禄思ひのまゝに、都に臂を張りたりしは、入道相国清盛【始皇帝】の、高運威福によつて也。そも〳〵清盛入道は、平家の嫡々にて、平正盛には孫、忠盛の子也。保元・平治の世の乱れに、清盛軍功ありしかば、位人臣の上を極めて、三十六国を領したり。しかの

清（清盛）「雑談浮説喋々しく、上を譏るは悪俗のいたす所。心を着けよ、手ぬるい〳〵。

成（成良）「威をもつて脅さねば、小人は懲りませぬ。御意の趣恐れながら、御尤に存じ奉ります。

みならず清盛の息女、平徳子と聞えしを、高倉院の、中宮に備へ奉りて、皇子誕生ましましけるが、御年わづかに三才なるを、天子の御位に即け奉る。安徳天皇すなはちこれ也。かゝれば入道相国は、既に天子の外戚となりて、いよ〳〵忌み憚る所なく、その心に違ふ者は、至尊・摂政家といふとも、あへて又許す事なし。ある時は、後白河の法皇を、鳥羽の离宮に押し籠め奉り、又ある時は、大臣・公卿四十余人を、遠き島根に流しまゐらせ、己を譏る者あれば、是非を言はせず搦め捕りて、やがて頭を刎ねさせけり。この故に、民百姓町人商人、尼法師に至るまで、額を合はして、相囁く事を許さず。かくても平家の政事を、なほ譏る者あらんかとて、童男・童女一千人を、日ごとに洛中洛外へ分かち遣はして、巷の風聞を探り聞かせ、もし露ばかりも悪し様に、言ふ者あれば、罪三族に及びけり。されば六波羅の千人禿とて、人皆これを恐るゝ事、虎狼にもいや増したり。

この時平家の執権は、阿波の▲左へ／▲右より民部大夫成良【李斯】也。成良文武の才長けて、天文地理に至るまで、諳んぜずといふ事なし。二へ続く

▼本来、六丁表の欄上に、巻数を示す「㊀」がある べきところ。

文句一の続き しかれども若かりし時、少納言入道信西を師とし仕へて、その学問の拠る所、『韓非子』をのみ旨としたれば、万の計らひいら酷くて、民を憐れむ心なし。これによりて清盛は、「弐なき者ぞ」と愛で喜びて、人多かるに第一の、切り者にぞしたりける。

○されば清盛入道は、己がまゝなる世に誇りて、驕りを極むる事大方ならず。摂津の国福原に、別殿数多作らんとて、国々へ夫役をおほせて、土石の工を起こす事、幾万人といふ事を知らず。「平安京を此所へ、移さばや」と思ひしかば、大厦高楼軒を連ねて、美を尽くしたる殿造りは、秦の始皇の阿房宮も、これには過ぎじと見えたりける。

かくて○中へ／○上より三年に及べども、その工作いまだ終はらず。これさへあるに△／△兵庫の浦に、築嶋を築かんとて、ます〳〵夫役を起こせしかば、民疲れ財尽きて、人の怨みは日に増せども、祟りを恐れ口を噤みて、大息をつくばかり也。只この困窮のみならで、出水の川に支へられ、あるひは道に病み患ひて、一日片時も参着に、■下へ／■中より参り遅るゝ者あれば、やがて頭を刎ねられけり。この故に道より逃げて、行方知れざ

（6オ　清盛、東方に妖気を見る）

成（成良）「なるほど、ちら〳〵見えます〳〵。

清（清盛）「何にもせよ、合点のゆかぬものじやてな。

る者あれば、その妻子を搦め捕らして、みな悉く誅せらる。前代未聞の虐政なり。

◆清盛、東方に妖気を見る

さる程に清盛入道は、ある日高殿にうち上りて、巷を行き来する者を、うち眺めてをはせしが、遥か東の方に当たりて、雲の如く霞の如く、陰々としてたち上る、白気定かに見えしかば、深く心に怪しみつゝ、執権阿波の成良を召し寄せて、云々と告げ給へば、成良しば〳〵うち眺めて、うち驚きて申やう、「雲に五つの品ありて、吉なるあり次へ（6オ）／続き凶なるあり。しかれども、あの白気は雲にあらず、霞にも候はず。もしくは世をうかゞふ曲者、東国に潜まり居るか、是もまた測りがたかり。それがし若かりしとき、先師少納言入道に、聞たる事の候ひき。およそ世の英雄たるもの、時を得ずして潜まり居れば、必ず白気たちのぼりて、よくその人を守るといへり。しからば東に世の英雄の、出生したる祥にやあらん」と、言ふに清盛眉を顰めて、「そはいかにして鎮むべき、手立てやある」と問ひ給へば、成良につことうち笑みて、「英雄東に生ずるとも、我が君の武徳四海に溢れて、上天子・摂家より、源平の武士いへばさら也、下万民に至るまで、靡かぬ草木もなきものを、何事をかし出だすべき。只うち置かせ給へかし」と、事もなげに申にぞ、清盛やうやく胸開けて、重ねて白気の沙汰に及ばず。しかれども▲右の中へ／▲左の上より何となく、快からぬ由もあれば、年頃信じ奉る、安岐国厳島の、弁才天に参籠して、なほも武運を祈らんとて、数千騎の供人を、前に立し後ろに従へ、難波の浦より船に乗りて、かの御社へぞ詣で給ふ。

◆清盛、厳島に参籠する

かねて祈念の旨あれば、小烏と名付けたる、平家重代の▼▲／▼▲宝剣を、社の辺に深く埋めて、上に碑を立てさせらる。これにより明経博士、清原の真人ときひろ朝臣文を作りて、入道相国清盛の、一代の武徳を誉めたり。すなはちこれを石に彫らして、武徳碑と名づけらる。又七日神楽を奏させて、巫女・巫らに、物数多取らせ給ふ。

参籠すでに七日に及び、結願の夜に清盛公は、拝殿に

（6ウ・7オ　二童子、清盛の夢の中で争う）

通夜し給ふ程に、寝るとも知らでまどろみたる、夢に色黒き童子の、白き衣を着たるが、北の方より走り来て、昨日立てたる武徳の碑を、うち砕きおし倒して、下に埋みし小烏の、宝剣を引出だし、おし戴き脇挟みて、走り去らんとする折から、東の方より忽然と、一人の童子走り来つ、面は雪より白くして、青き衣を着たりしが、やりも過ぐさず黒き童子の、携へたる宝剣の、瑺を掴んで二足三足、たぢ〳〵〳〵と引戻せば、彼方も曲者ちつとも騒がず、見返りながら振り切つて、行かんとするを引戻す、互ひの手煉虚々実々、しばらく挑み争ひつゝ、黒き童子は嵩にかゝつて、しきりに拳を閃かし、白き童子の肩先を、数多度打ちしかど、白き童子はちつともたゆまず、隙を見すまし力を極めて、只一引きに宝剣を、奪

白（白童子）「かうした見えでは箱王と、とちぼう丸【▼未詳】かと言はねばよいが。

黒（黒童子）「無駄を言はずにこつちへ渡せ。

白「小癪な事を、そこ放せ。

ひ取りつゝ抜く手も見せず、黒き童子を只一撃ちに、●右へ／●左より唐竹割りに斬り倒せば、その切つ先より光を放つ、光明およそ四十筋、大きなる筋、内に三つあり。時に海鳴り山荒れて、雷電振動凄まじく、忽然として件の童子の、行方も知らずなりぬと思へば、愕然として驚き覚めたる、清盛しきりに胸うち騒ぎて、流るゝ汗をおし拭ひ、「誰かある」と呼び給へば、「おん供に侍ひたる、矢野の季村が弟、七郎高村候」と応へて、御前に参りしかば、「何時なるぞ」と問ひ給へば、「明くるに程も候はず。寅の一点ならん」と申。夢の心を考へ給ふに、白き童子が青き衣着て、東の方より走り来つるは、東方明けんとする時刻と符合す。「こは良き祥にあらざるべし」と、思ひつゝなほはかなき夢を、人に告げんはさすがにて、次へ（6ウ・7オ）／心いよ〳〵楽しまず。やがて下向の纜を、解かして都へ帰り給ひぬ。

▼矢野兄弟は、『源平盛衰記』巻三十三に登場する。そこでは、兄の名が「家村」とあるが、馬琴は徳川将軍家の通字「家」を避けて、「すゑ村」に改めたと思われる。

後に思ひ合はすれば、黒き童子は木曽義仲、色の白くて、衣の青かる童子は、是頼朝の、起こるべき祥也けり。義仲も頼朝に、等しき清和源氏にて、色は白きを尊めども、義仲はこの後、北国に旗を挙げて、都まで攻め上りぬ。北方玄武その色黒し。又頼朝は、東国に義兵を起こして、遂に平家を滅ぼしたり。東方青龍その色青し。且四十条の金光・三筋の光明は、父子三代四十年の、基をこゝに示すなるべし。

◆清盛、仙丹を求める

○さる程に清盛入道は、日を経て六波羅へ帰り給ふても、かの夢の事心に掛りて、とにかくに胸安からず。つら〳〵思案し給ふに、「討ち漏らされたる源氏の武士の、国々にはなほ多かり。たとひ野心の者ありとも、我が寿命尽きずして、いつまでも世にあらば、頭を擡げさすべうもあらず。不老不死の仙薬を、伝へたる者あらんには、用ひて功を試さんものを」と、ひたすらに思ひ起こして、「さる筋に心を得たる、博士やある」と尋ね給ふに、

（7ウ・8オ　清盛、如福に渡宋を命ずる）

「摂津の国、武庫山のかたほとりに、進士如福【徐福】といふ博士あり。堀川院の御時に、蔵人で候ひしが、職を辞奉りて、彼処へ退隠したる也。彼は黄老の学を好みて、長命の術を得たり。さるにより、齢九十に及べども、面影いまだ衰へず。この者を召し寄せて、問はせ給はゞ御求めに、応ずる由も候はん」と、申す者のありしかば、「さらば如福を疾く呼び寄せよ」と仰せあり。六波羅第

福（如福）「盲千人目明き千人【▼「仙人」と「千人」の洒落】なんどとて、沢山さうに申しますれど、行く先の知れぬ物は雁と燕、居所の知れぬ物は、冬の蛙と仙人でござりませうかへ。

〽童男童女を求むるは、千人禿の告げ口を、減らさうと思ふ料簡でもあらふか。しからば如才のない親父だと、季定腹の内に誉めてゐる所。

清（清盛）「健やかさうな翁めだ。不死の薬を求め参らば、孫曽孫までも召し使はん。童どもは幾人でも、選み取つて●／●連れて行けさ。

二の執権なりける、筑後介季定【▼史実は家定。ここでも家字を憚る】うけ給はりて、武庫山へ早馬の使ひを遣はし、日ならず如福を召し寄せて、やがて御前に将て参りしかば、入道相国喜びて、事云々と説き示しつゝ、かの仙丹を求め給ふに、如福答へて申すやう、「それがしはこの年頃、好みて道書を読みたれども、不老不死の薬方は、伝へたる事候はず。そは仙人に近付きて、乞ひ求め候はずは、何者かよくこれを知るべき。唐土には道家と唱へて、老子の道を伝へたる、行ひ人のありと聞ぬ。さらでもかしこは山々に、仙人の多かる由は、『列仙伝』といふ唐本にて、世の人の知る所也。かゝれば唐土宋の天子へ、御使ひを遣はされて、彼処の山々を求めさせ給はゞ、つひに仙人に尋ね会ふて、不死の薬を授けらるゝ、よすがなしとすべからず。しかれども仙人は、よろづ清浄を旨として、五慾を厭ひ候へば、童男童女五百人を、御使ひにさし添え給へ。かく懇ろに用意せば、仙人必ず受け喜びて、霞を分け雲を下り、対面せん事疑ひなし」と、▲右の下へ／▲上の左より手に取る如く申すにぞ、清盛入道その義に任して、にはかに進士如福を、唐土へぞ遣はし給ふ、船出の用意整ひければ、すなはち童男童女五百人と、黄金五千両を、如福に給はりて、■／■「汝宋国へ渡海して、かの仙丹を求めて来よ」と、自ら命じ給ひけり。

◆重盛、如福に祠堂金を托す

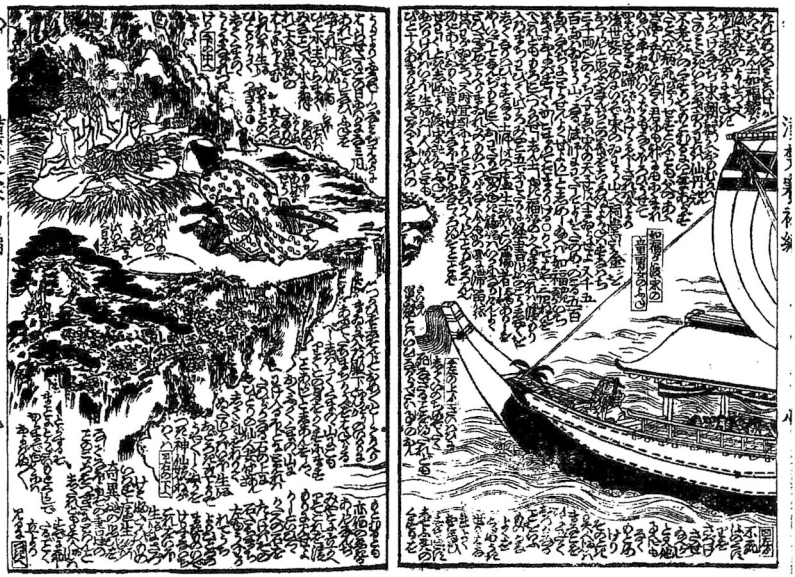
されば又清盛の嫡子、小松の大臣重盛【扶蘇】は、その心様親に似ず、慈悲深くして人を憐れみ、道を守りて且孝也。こゝをもて此年頃、幾度となく親を諫めて、人を救ひ給ふ事少なからず。しかれども入道は、空吹く風と聞流して、悪行いよ〳〵募りにければ、重盛これをうち嘆きて、大臣の職を辞し、世にも人にもたち交はらで、次へ（7ウ・8オ）／たれ籠めてのみをはせしが、此度進士如福が、渡宋のよしを伝へ聞て、忍びやかに招き近づけ、「汝宋朝へ赴かば、頼みたき一義あり。我は仙丹不老の薬を、求むるに暇あらず。たとへば病死せずといふとも、父の悪行やむ時なく、君にも神にも憎まれ給へば、平家は幾何もなく滅び失せて、屍を馬蹄にかけらる

べし。されば今より後世の為に、いかで宋の育王山へ、祠堂金を送らんと思ふ也。汝この義を心得よ。金はすなはち三千両也、この内千両は、宋の天子へ参らせよ。又千五百両は育王山なる、法師に渡して由を頼め。残る五百両は汝に取らせん。よくせよかし」と示し給へば、如福一義に及ばずして、畏まりてぞ退りける。

▼育王山は浙江省寧波にあり、禅宗五山の一。重盛の祠堂金のことは、『源平盛衰記』巻十一「育王山に金を送る事」に見える。

◆廬生、熊野で仙人に会う

○かくてはや、三四年を経たれども、唐土へ遣はせし、進士如福の帰り来ざれば、清盛入道待ちわびて、此頃都五条わたりに、経書の講釈をして生業にすなる、土師の廬生【廬生】といふ、儒者ありしを召し出だして、「汝唐土へおし渡りて、かの如福はいかになりけん、よく問ひ定めて帰り参れ。かの者は恙なく、今もかの国に滞留せば、わが意を伝へ時宜によりて、伴ひ帰らん事もちろん也。功あらば重く賞せん、等閑にな心得そ」と、言葉忙しく説き示して、渡宋の船を給はりければ、廬生は門人と、供人十人余りを従へて、難波の浦より船出しつ、波路遥かに走らせたる。この日にはかに波風荒れて、楫を失ひ船を破られ、門人・供人・水手らまで、みなことごとく水に溺れて、大魚の腹に葬られ、廬生一人辛くして、熊野の浦に流れ着きけり。▲下の中へ／▲左の上より「幸ひにして命めでたく、死なざることを得たれども、災難とはいひながら、大事の御使ひをし損じて、おめ〳〵として帰り参らば、入道殿下の怒りにあふて、たちまち頭を刎ねらるべし。しばらく熊野の山に籠もりて、この身を隠すに増す事あらじ」と、思案をしつゝ奥深く、熊野の山に分け入る程に、と見れば平らかなる石の上に、一人の仙人安坐して、気を練りてゐたりしかば、廬生驚き立寄りて、うや〳〵しく額をつき、「神仙、願はくは□右の下へ／□左より不死の薬を、授けさせ給へかし」と、又他事もなく求めけり。その時異人は眼を開きて、「愚かなる事を言ふものかな。欲を止め浮世に離れ、よく行ひ澄まさずして、不死の薬を求むるとも、亦何の益



（8ウ・9オ　盧生、熊野で仙人に対面する）

かあらん。汝都に立帰りて、これを清盛に見せよかし」と、言ひつつかたへの石を叩けば、その石たちまち左右へ分かれて、内より一つの巻物出でけり。すなはちこれを盧生に、授けて再びもの言はず。盧生奇異の思ひをなして、なほもその書の事の心を、具に問はんとしたれども、異人はすでに死したるごとく、立寄り見るに［つぎへ］（8ウ・9オ）／息絶えたれば、又いかにともせん術なくて、道を求め麓に赴き、つひに六波羅に帰り参りて、ありつるまゝに訴へけり。

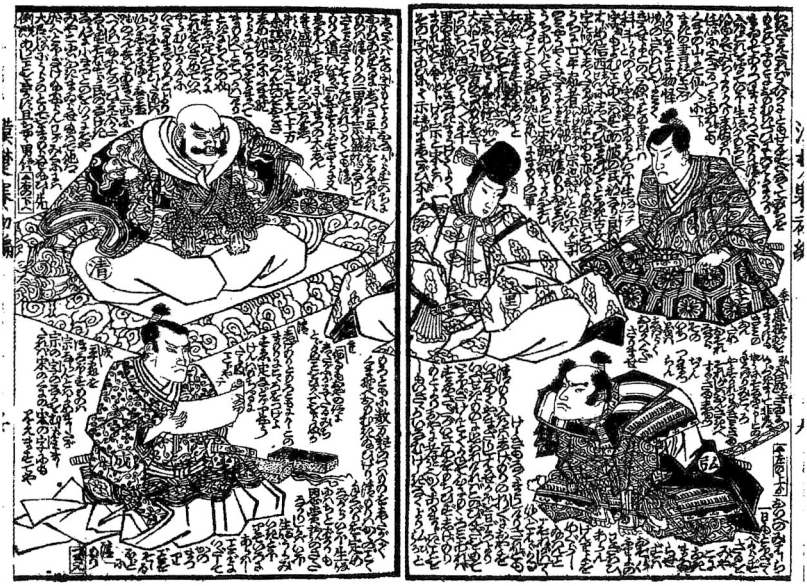
◆清盛、仙書を読み誤る

清盛入道これを聞て、「盧生が唐土へ得行かで、道よ

［如福が渡宋の童男女の船］

仙（仙人）「和主の願ひの不憫さに、此一巻を▲／▲取らするぞ。まことに灯台もと暗しで、唐まで行くには及ばぬ〳〵。

いほ（盧生）「それは思ひも寄らぬ賜物。立帰つて六波羅殿へ、具に●／●申上げませう。



（9ウ・10オ　成良、予言を解読する）

り帰り来ぬるは、任に堪へざる罪あれども、熊野山にて仙人に、一巻の書を授かりしは、まことに物怪の幸ひ也。読みて聞かせよ」と宣ふに、その書は科斗の文字【▼中国古代の文字】にやあるらん、廬生一字も読む事あたはじやテ。

季（季定）「愚按を申すも君の御為、恐れながらその一義は、しばらくお控へ下さりませ。

重（重盛）「何事も親の仰に、従ふが子たる道。届かぬことを、控へてをらぬか。

弘（頼弘）「大臣様にかしづきまして、非常に備ふる彼処の手配り。御心安かれ、我が君様。それがしは御先へ、すぐさま出陣仕らん。

清（清盛）「重盛ともろ共に、彼処の守りに心をつけよ。季定などが料簡は、用ふるに足らぬことじやテ。

成（成良）「平家を滅ぼす者は、宗ならんとは読めましたが、宗の字の、中を虫食みましたれば、宋の国の宋の字にも見えますてや。

ず。阿波の民部成良は、はじめ信西に従ひ学びて、遠き古文字を知りたるが、成良にも亦得読めず。只その内に、「亡平家者宗也」【▼原作では「亡レ秦者胡也」】といふ六字のみ、やうやく定かに読み得しかば、清盛驚きうち案じて、「さては唐土宋朝より、襲ひ来つる事あるにや。筑紫に守りの軍兵を、増すにはしかじ」と騒ぎ立ちて、飛騨の左衛門丞景経を大将として、五万の兵をさし遣はし、「鎮西の浦辺々々に、千里の長城を築き設けて、よく守れ」とぞ命じける。

宗と宋とはその字相似て、示に従ひ木に従へば、その字もとより同じからず。後に思ひ合はするに、実に平家を滅ぼすものは、清盛の二男宗盛なりしを、悟らざるこそうたてけれ。

◆重盛、熊野へ退けられる

○かくても清盛入道は、いまだ心安からず、さらに又思案して、嫡子小松の大臣重盛に、豊後左衛門頼弘【蒙恬】をさし添えて、十万余騎の、軍兵を起こさしめ、「紀の国熊野浦に寨を構へて、守るべし」とて遣はしけり。

時に筑後介季定、秘かにこれを諫めて言ふやう、「昔が今に至るまで、唐土より我が国を、襲ひし例は候はず。しかるに無益の軍兵を、数多西国へ遣はし給ふ、その費え大方ならず。それすら民の嘆きならんに、小松殿をいかにぞや、都には置き参らせ給はで、他郷へ遠ざけ給ふやらん。わが御国には大臣に、浦の寨を守らせ給ひし、先例ありし事を聞かず。且嫡男は▲右の下へ／▲左の上より御家の御柱、一日も遠ざくべからず。さるを都に置き参らせずは、恐らく不慮の禍あらん。賢慮をめぐらし給はん事こそ、願はしく候へ」と、憚る気色もなく申しけり。されども清盛入道は、重盛の折々に、親を諫めて已まざりし、博士顔を日頃より、いぶせきものに思はれければ、この便宜をもて遠ざけんとて、かねて心に目論見あれば、季定が諫めを用ひず。重盛もとより親に孝也、かくあるまじき事をしも、いさゝか否む気色なく、頼弘ともろ共に、数万の兵を従へて、熊野へ赴き給ひけり。

◆**盧生、生き埋めに処される**

清盛はかくの如く、手配りを定めながら、盧生にはちとばかりも、恩賞の沙汰なかりしかば、盧生怨み憤りて、色に顕し言葉に出だして、かの政を譏る程に、清盛〔つぎへ〕（9ウ・10オ）／此由を伝へ聞て、「憎き儒者めが言ひける事よ。彼を唐土へとて遣はせしに、船を損なひ人を失ひ、おめ〳〵として帰り来つるを、許しおきたる恩を思はで、我を罵るものならば、只今思ひ知らせん」

（10ウ　盧生、処刑される）

とて、難波の小次郎経久をもて、盧生を搦め捕らせ、且その親類・弟子らまで、一人も漏らさず獄舎に繋がせ、黒谷の片陰に、大きなる穴を掘らせて、皆生き埋めにせられしが、「世に漢籍のあればこそ、人の国を尊とみて、心驕れる曲者多かり。書籍は和書にてこと足れり。漢籍は皆焼くべし」とて、世にありとある、限りの漢籍を召し取つて、皆悉く焼き捨てらる。されば盧生が縁に繋がれて、こゝに命を落とせし者、五六十人に及びけり。このいら酷き刑罰に、世の人いよ〳〵怖ぢ恐れて、親しき友も団居せず、口を噤み気を籠めて、遠慮に過ぎたる輩は、妻子にだにもうち解けて、もの言ふ事はなかりけり。（10ウ）

久（経久）「ゑせ博士めが口の咎、まづそ奴から埋めろ〳〵。

雑兵「人を咒はゞ穴二つといふ、譬へはあれどこれは又、▲／▲口を叩いて一つ穴、これではぐうの音も出ぬはづだス。

《第一冊　後表紙封面》　奥目録　※立命館ＡＲＣ蔵本

漢楚賽擬選軍談初編　曲亭馬琴作　袋入合本上下各二冊
歌川國安画
同作　同画　全八号　合本袋入　上下
子の年内より、
引続売出し申候〔
擬太平記演義三國志初編　曲亭馬琴作　全八号　合本四冊
袋入上本　年々に梓をつぎて、数編の大部にいたるべし〕
雅俗用文　神田蓑笠翁作文　深川文蜘堂書　中本　全一冊
書肆　地本問屋　江戸馬喰町三丁目　永寿堂西村屋與八板

一たび巻を開くときは、手を措くいとまなきまでに、興あらんために作れり。

おなじく第二編〔同作　同画　全八巻　合本袋入　上下各二冊／第二へんも丑の早春新板　子の年内より、引続売出し申候〕

擬太平記演義三国志初編〔曲亭馬琴作　全八巻　合本四冊／袋入上本　年々に梓をつぎて、数編の大部にいたるべし〕

この書も右の漢楚におなじ。唐山蜀漢・呉・魏のたゝかひを、『太平記』の世界にとりなして、一事も漏さず綴らんとなり。これも亦遠からず、つゞきて刊行せまくほりす。よりて且その書名を掲出して、四方の御ひいき方に、報たてまつるになん。

雅俗用文〔神田蓑笠翁作文　深川文蜘堂書〕　中本全一冊

この書は文中に、多く雅言を雑へて、解し易き為に奥にその、字義出処を注したり。これに倣ふときは、文人墨客の、往来にも羞ることなし。世にある処の用文章は、皆俗字のみなるを、こゝには俗中に雅文

漢楚賽擬選軍談初編〔曲亭馬琴作／歌川国安画〕　袋入合本上下各二冊

この冊子は、唐山漢楚の闘戦を、頼朝・義仲両雄の、確執に撮合して、いとおもしろく綴りたる也。抑唐山の旧事は、媛刀称【▼「禰」の誤】達に解し易からず。真片仮名の目に熟れぬ、もの〳〵しきを和げて、漢楚興亡の、趣に倣ふといへども、人物・地名は皇国の故事にて、見るにめがれすることなし。

あり、雅中に俗用を兼たり。手簡の手本たるべき者、亦これに優ことなし。

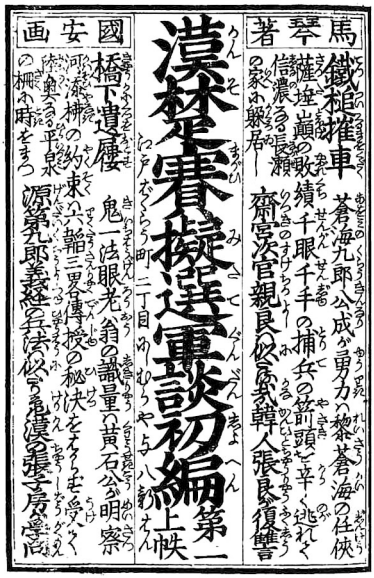
書林并ニ地本問屋　江戸馬喰町二丁目

永寿堂西村屋与八板

▼右のうち、『擬太平記演義三国志』は、未完に終わる。『雅俗要文』は天保十二年に至って、青雲堂英文蔵から刊行される。

▼底本は改装合綴本のため、後表紙を欠く。原装本の後表紙は煉瓦色。

《第二冊　前表紙・同見返し》



（表紙）

曲亭馬琴著

和漢撮合／初編上帙

毎篇八巻合本

歌川国安絵画

漢楚賽擬選軍談　弐

（見返し）

馬琴著　鉄槌摧　車　蒼海九郎公成が勇力は、黎蒼海の任侠　薩埵嶺の敗績、千眼千手の、捕兵の箭頭を辛く逃れて、信濃なる、長瀬の家に躲居し、斎宮次官親良は、似たる哉、韓人張良が復讐

漢楚賽擬選軍談初編〔上帙第二〕

江戸ばくらう町二丁目　にしむらや与八新はん

国安画　橋下　遺　屨　鬼一法眼老翁の識量は、黄石公が明察　河添柳の約束は、六韜三略、伝授の秘訣をはからず受て、陸奥なる、平泉の柵に時をまつ、源第九郎義経の兵法は、似たり鳧、漢の張子房が学問

※立命館ＡＲＣ蔵本

（三）

◆妖童の童歌

此頃鳥羽の恋塚のほとりに、夜な〳〵童ども集まりて、「平々亡而阮々興、阮々興而帰一阮」と囃しけり。入道相国この事を伝へ聞て、その心を博士に問ふに、皆忌み憚りてよく言ふ者なし。入道いよ〳〵疑ふて、又阿波の成良に問ふに、成良が言ふやう、「これは当家を譏る者の隠し言葉也。『平々滅びて阮々興らん』とは、平家悉く滅び失せて、諸々の源氏興らんといふ也。阮は源の字に通ずれば、阮々は源々也。又『源々興つて一源に帰せん』とは、諸々の源氏興りて、後に四海を一統する、源氏の大将あらんと也。かゝればこれ当家を譏る、隠し言葉に疑ひなし」と、言ふに入道いたく怒りて、「そは甚だしき妖言也。思ふに童らが心より、作り出だせし事にはあらじ。必ず教えて言はしめたる、曲者のある●／●ならん。その童らを搦め捕つて、叩かば本人を指ざらん

（11ウ　経久、童子を取り逃がす）

童「べかちやん〳〵べか〳〵〳〵。こゝまでござれ、甘酒進じよ〳〵。

童「をぢさんあばよ、一昨日来なよ。お暇乞ひが済んだから、サア〳〵行かう〳〵。

童「空目を使つて睨む奴さ。大笑ひだのふ。

久（経久）「取り逃がしたか○／○残念な。

〽此所にてちよつと口上。京橋稲荷新道、坂本氏の仙女香は、無患子に付けても白くなるべし。黒油美玄香は、実盛【▼斉藤実盛】も裸足で逃げる。

や。早くこの義を計らふべし」とて、難波小次郎経久を、鳥羽の里へぞ遣はしける。さればこの経久は過ぎつる頃、布引の滝のほとりにて、悪源太義平の、怨霊に討たれて死したる、難波次郎経俊が子也。心利たる若者なれば、清盛すなはち、経久を選み出だして、此度の討手に遣はしけり。

▼右の記述は『盛衰記』巻十一、難波六郎経俊の雷死と、『平治物語』巻下で、難波三郎経房が、悪源太の怨霊に蹴殺される一件とを混用したもの。

かくて難波小次郎経久は、数多の組子を従へて、鳥羽の里へ赴きつゝ、▲右へ／▲左より恋塚のほとりに伏し隠れて、事の様を窺ふに、その夜も果たして数多の童、恋塚のほとりに集まりて、云々と歌ふ程に、経久が組子ら前後に起こり、左右よりさし挟みて、搦め捕らんとしてけるに、怪しむべし次へ（11オ）／件の童は、煙の如く消え失せて、行方も知らずなりにけり。経久深く訝りて、なほその行方を穿鑿すれども、ちとの手かゝりだもある事なければ、つひに都へ立帰りて、事云々と聞え上げしに、清盛入道いよ〳〵怒りて、そのほとりなる里人を、一人も残さず搦め捕らして、厳しく拷問したれども、件の童の出でし所を、誰も知りたる者はなきを、なほ「この内にあるべし」とて、残らず頭を刎ねさせて、やゝ憤りを晴らしけり。

◆刀狩りと福原の鉄人

只これのみにあらずして、天変地妖しば〳〵現れ、山崩れ川涸れて、一日も安き事稀なれば、清盛心楽しまず、「げに世を乱さんと謀る逆賊の、時を窺ふ事もやあらん。その未然を防がんには、要こそあれ」と思案して、諸々の民百姓に、大刀剣を帯ぶる事を許さず、「武士といふともいはれなく、余計の武具を蓄ふべからず」と触れ掟てて、世の中の大刀剣はさら也、鎧兜に至るまで、大方ならず取り上げて、その鉄をもて大きなる、鉄人四つを作り出ださせ、これを福原の、館の四方へ埋めさせて、都の将軍塚に擬へけり。

◆親良の雌伏

○こゝに又、京家の武士の浪人に、前の斎宮次官親良

【張良】といふ者▼／▼あり。親は藤亜相成親卿の家令にて、世々かの家の恩顧を受けたり。しかるに成親卿は、往ぬる治承元年の頃、後白河院に勧め奉りて、康頼・俊寛僧都と共に、平家を滅ぼさんと計りしが、事たちまちに顕れて、各々遠き嶋に流され、●右の下へ／●左の上より成親卿は、備前の配所にて世を去り給ひ、親良が父は討たれけり。これにより親良は、美濃・信濃の方に難を避けて、中三権頭兼遠が親族なる、長瀬判官代義定が家に隠れて、光陰を送りしが、「いかで都のあり様を、外ながら見ばや」とて、忍びて京へぞ上りける。

◆親良、蒼海九郎と出会う

○こゝに又、下京の片ほとりに、生物知り読兵衛【趙三公】と呼ばれたる、一人の百姓ありけり。齢は既に六十に余りて、ちとの小文才ありければ、常に日本・唐土の、古事を知り顔に、■中へ／■下より里人らに説き誇るを、楽しみにしてければ、里の男女は農業の暇ある毎に、彼が宿所にうち集ひて、例の物語を聞けり。

かくてある日読兵衛は、里人らをうち寄せて、昔物語をしたる言のついでに、「この御国はいにしへより、逆徒も兵乱もなかりしに、●／●近世将門・純友が、逆乱ありてよりこのかた、奥の前九年・次へ（11ウ・12オ）／続き後三年の戦ひあり。又義親・忠常が逆乱あり、保元・平治の戦ひは我も人も、目の当たりに知りたる事也。されば世の中無為にして、太平ならん事こそ、願ふべき事也」と言ふを、里人らうち聞て、「そも太平とはいかなる時を指して、しかくといふやらん。詳らかに示し給へ」と、問へば読兵衛頷きて、「春は温かにして夏暑く、秋は冷やかにして冬は寒く、四時その時節を誤つ事なく、五穀年々によく実りて、万民飢へず凍ゆる事なし。人皆忠孝にして恥を知り、道に落ちたるを拾はず。夜戸を鎖ず、国に盗人の生ずる事なく、家に不孝の子供生まれず。行く者は道を譲り、利を争ふて罪を醸する、訴へ人ある事なければ、獄舎の内に罪人稀也。されば五日の雨土くれを破らず、十日の風枝を鳴らさず。かりそめにも偽り飾る者なければ、商人も価を二つにせず、貴賤楽しみを等しくして、豊かならずといふ事なし。こ

（11ウ・12オ　読兵衛ら、後難を恐れ去る）

れを太平の世といふなり」と、示せば皆々膝を進めて、「しからば今の世の政（まつりごと）は、何と名付けてよからん」と、問へば読兵衛声を潜めて、「あな声高し、人もや聞かん。各々（おのゝ）はまだ聞かずや、今の政（まつりごと）を識る者は、罪三族に及ぶなるに、我らは今の事を得いはず。言はじ〳〵」と頭（かうべ）を振りて、しばらく口を噤（つぐ）みけり。

蒼（蒼海九郎）「逃げるざまはへ。

良（親良）「これさ待たつせへ。まだ言ふ事があるのに、恐れる事はない。アハ、、、、いかいたはけな。

よむ（読兵衛）「ゑらい人だ。こはやの〳〵。

女「をぢさん、どつちへ逃げようのふ。

男「かざかみ村へ行くべい〳〵。

（右上。親良、九郎と邂逅する）

良「打ち明かしたる胸と胸。そんならお世話になりませうか。

蒼「委細（いさま）の事は宿元で。わしと一緒にござりませ。

親良これを立ち聞して、「かの老人はたゞ者ならじ」と、思ひつゝ進み入て、諸人にうち向かひ、「汝ら平家の政を、評判する事ならざるか。しからば我ら言ふて聞かせん。入道清盛の政は、すべて非道にして、君臣の礼儀を忘れ、ある時は、法皇を押し籠め奉り、又ある時は、大臣・公卿を流しまゐらせ、時なく民を駆り使ひて、福原に、大厦高楼を建て連ねて、山を崩し●上へ／●下より石を切り崩し、兵庫に築嶋を築かせて、海を埋むるに人柱を以てせり。この故に、男は耕す事得ならず、女は織り紡ぐ暇を得ず。罪なくして頭を刎ねられ、恨みあれども訴ふるに由なし。されば漢籍を焼き捨て、儒生盧生らを穴にしたり【▼焚書坑儒】。これを名づけて乱世といふ。秦の始皇の悪逆にも、いかにして劣るべき。なれども民の口を噤めて、囁く事だも許されねば、▼▲下へ／▼▲上より汝ら恐れて言はぬにこそ」と、言ふに読兵衛驚き恐れて、「そは何事ぞ、さる人と、苟且にも物言はゞ、巻き添へせられて搦められん。皆々逃げよ」と騒ぎ立ちて、尻切れ草履履きあへず、外の方を指して走り出づれば、里人らも遅れじとて、みな散り〴〵になりにけり。

親良かゝと次へ（12ウ・13オ）／うち笑ひて、「取るにも足らぬ愚人かな」と、独りごちつゝ見返れば、後ろに一人の大男、いつの程にかたゞすみたり。その時大男は、親良に●中へ／●上よりうち向かひて、「御身は平家に怨みある、人とこそ察して候。それがしも亦此年頃、故主の怨みを返さんと、思へども助けを得ざれば、姿を窶し時を待ちて、心ならずも年月を経たり。いざ給へ、意中の機密を明かさんず」と、言ふに親良頷きて、後につきつゝ人家に遠き、森の木陰に赴きけり。

その時件の大男が言ふやう、「人の姓名を尋ぬる者は、己が名をまづ名乗るといへり。それがし事は、往ぬる平治の戦ひに、討たれ給ひし悪源太、義平主の家の子に、蒼海九郎公成【蒼海公】といふ者也。平家は故主の仇なれば、入道相国清盛を、一太刀怨みんと思ひつゝ、姿を窶し市に隠れて、つけ狙へども折を得ず。しかるに御身も我に等しき、志ありと察したり。願ふは共に力を合

はして、年頃の本意を遂げん。御身の心いかにぞや」と、問へば親良声を潜めて、「賢察の如くそれがしは、藤の亜相成親卿の、恩顧の侍斎宮の次官、親良と呼ばれし者也。かの入道は君父の為に、不倶戴天の仇なれば、いかで怨みを返さんと、思ふ事既に久し。しかるに御辺も我に等しき、大望あるこそ幸ひなれ。世の風聞を伝へ聞くに、清盛は、近き程に都を出でて、関八州を、巡行すと定かにいへり。しからば道に下待ちして、只一討ちに怨みを返さん。御辺の心いかにぞや」と、問はれて公成□右の下へ／□左の上よりにつことうち笑み、「我も亦その目論見あり。それがし力人に勝れて、三百斤なる鉄の、鎚を飛ばして敵を討つに、当たらずといふ事なし。かゝれば清盛がうち巡る、便宜の山に伏し隠れて、嵩にかゝつて高みより、件の鎚を投げ下さば、清盛たちまち微塵にならん」と、言ふに親良喜びて、なほ胸中を囁き示し、かねて用意の次へ（13ウ・14オ）／つゞき金一包みを、公成に渡しにければ、公成これを受けずして、親良を我が隠れ家に、留めて便宜を窺ひけり。

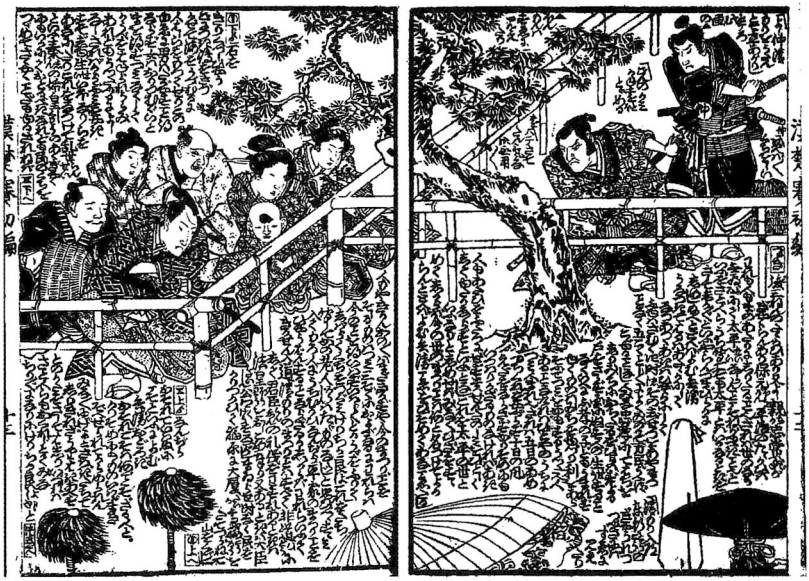
◆清盛、東国巡行に旅立つ

○これはさておき、相国清盛入道は、うち続く天変地妖の、さすがに心掛かりなるに、かの東方に立つ白気の、いよ〳〵盛りなりければ、「我東を巡行して、民の邪正をあなぐり糺して、件の白気を鎮むべし」と、やうやくに思ひ定めて、にはかに東行の由を触れ知らせ、執権阿波民部の大夫成良、秦木工頭長高【趙高】らをはじめとして、宗徒の家の子二百余騎、士卒一万余人を従へて、はや都をぞ発ち給ふ。

此時清盛の二男宗盛【二世皇帝胡外】は、年なほ二十ばかりなりしが、「共に行かん」と願ひけり。宗盛は入道の、殊に愛子でありければ、やがてその意に任せつゝ、車の尻にうち乗して、東へ伴ひ給ひけり。

◆義仲、清盛の行列を窺う

さる程に日頃経て、入道父子はなまよみの、甲斐国に至りし時、遠近の里の老若男女、巷に出て見物す。そが中に、年なほ若き一人の武士、旅装ひをしたりしが、件の群集の内にあり、既に近付く清盛の、○右の中へ／



（12ウ・13オ　義仲・頼朝、清盛の行列を窺う）

○上の左より供の行列を見て、怒りに得堪へず、「彼無道にして時を得たり。我今奪ふて取るべし」と、言ひつゝ刀を抜きかけて、走り寄らんとする程に、五十ばかりなる一人の武士、「こはそゞろなり。■／■今こゝで、よしなき業をする事かは」と、止めて余所へ伴ひけり。

そも〳〵件の若き武士は、もとの帯刀先生義賢の孤児なりし、木曽冠者義仲【項羽】也。又義仲を止めし武士は、信濃国の住人、中三権守兼遠【項梁】也。この兼遠は義仲の、母方の伯父なりければ【▼これは本作の虚構】、義賢の滅びし頃、木曽へ義仲を迎へ取りて、その身は乳人親となりつゝ、此年頃養育しけり。されば義仲

〳〵義仲清盛を討たんとて立上がりしところ。此画の▲／▲本文は末に見えたり。

仲（義仲）「思へば〳〵口惜しい。

〳〵権守兼遠止める。

遠「ハテさて短気な、御無用々々々。

〳〵清盛入道東行の行列。具には末に見えたり。

（13ウ・14オ　親良・九郎、清盛を襲撃）

は総角の頃よりして、大いなる志あり、「いかで平家を討ち滅ぼして、再び源氏の世にせん」とて、忍びて時を待ちたるが、「清盛の行列を、外ながら見ばや」とて、兼遠ともろ共に、此所まで来たりし也。されば兼遠は、人の見咎めん事を恐れて、義仲を伴ひつゝ、早く信濃へ帰りけり。

◆頼朝も行列を窺う

かくて又清盛入道は、伊豆国に至りし時、見物の群集の▲右の印へ／▲印の左より内に、年若き一人の武士あり。かの行列を○下へ／○中よりつくゞと見て、「大良（親良）「今こそ本望、あつぱれ手の内。

作者曰「全て本文は画より遅るゝ也。繰り返して又画と合はせ見るべし。

蒼（蒼海九郎）「腕に覚えは日頃の手練、狙ひ違はずまつこの通り。

〈此所行列なれば、いづれも無言なり。よつて言葉書きなし。

（14ウ・15オ　蒼海九郎、とり囲まれる）

【▼「丈」脱カ】夫たらん者、まさにかくの如くなるべし」とぞ言ひける。この人はこれ伊豆国、蛭が小島の流人なりける、源　頼朝【劉邦】なり。この条の画は上に出だせり。此本文と合はせ見るべし。

◆蒼海九郎、清盛を襲撃する

○さる程に、斎宮次官親良は、蒼海の九郎公成ともろ共に、清盛入道をつけ狙ひて、秘かに東に下りつゝ、事の便宜を窺ひしに、東海道なる薩埵峠は、前は海、後ろは山にて、究竟の所也。次へ（14ウ・15オ）／「こゝにて帰るさを待ちて討たん」とて、しばらくその辺に隠れて

仕丁「一しほ痛めてぶつちめろ〳〵。

蒼（蒼海九郎）「仇と見たるは空車。▼／▼本意も遂げず口惜しい。

仕丁「この下手碁めが、仕丁に掛けるぞ、イヤ取った。

▼「四丁」は囲碁用語。あと一手で相手の石を取ることができる状態をいう。

をり。既にして清盛入道は、関の東を落ちなく巡りて、都の方へ帰り給ふに、薩埵山は今と変はりて、昔は海辺が、旅人の往還也。かくて相国入道の車は、薩埵山の根方なる、波打ち際を過ぎる程に、待ち設けたる蒼海の九郎が、峠の出先の木陰より、丁と投げ打つ鉄の、鎚は狙ひをちつとも違へず、車を微塵に打ち砕きぬ。しかれども清盛は、かねて用心堅固にして、その身は副車に乗りたりければ、打ち砕かれしは空車にて、いさゝかも恙なし。平家の供人此為体に、「すは曲者あり。狩り出だせよ、やるな逃すな」と罵り騒ぎて、山ともいはず磯ともいはず、はや八方に散り乱れ、おつ取り巻いて探す程に、蒼海の九郎は既にはや、行く手の道をとり塞がれて、逃れがたしと思ひしかば、三尺ばかりの段平を、抜きかざし現れ出でて、当たるに任せて斬り倒す、勇士の太刀風瞬くひまに、手負ひ死人は数を知らず。

（15ウ　蒼海九郎、自尽する）

その時妹尾小太郎兼通は、曲者を取り逃さじとて、弓矢携へ狙ひ寄つて、よつ引て放つ矢に、蒼海九郎は胸を射られて、「これまでなり」と思ひにければ、持つたる刀を取り直し、切つ先を口に貫きて、うつ伏しになりて死にけり。

清盛入道いたく怒りて、「件の賊を見知りたる、者も通（兼通）「生け捕らんと思ひしに、自滅をせしか、残念な。

〈蒼海公の事、『史記』には張良と共に逃れし如く聞こゆ。こゝには演義の趣に△／△よりて作れり。

やある」と問ひ給ふに、ある人答へて、「彼は悪源太義平の家の子なりし、蒼海九郎公成也」と申すにぞ、「扨は同類あるべし」とて、隈なく尋ねさせけれども、斎宮次官親良は、いち早く逃れ去つて、信濃国へ帰りつゝ、長瀬義定が家に隠れ居たりしかば、これを知る者なかりけり。

これにより、蒼海九郎公成が、首を磯辺に斬りかけて、そが同類の穿鑿は、事やうやくに止みにけり。

（かんだ・まさゆき　法学部准教授）